

## 藤原正彦著『国家の品格』

夫れわが金甌無欠の国体は家族主義の上に立つものなり。家族主義の上に立つものとせば、一家の主人たる責任の如何に重大なるかは問ふを待たず。この一家の主人にして新に発狂する権利ありや否や、吾人は斯る疑問の前に断乎として否と答ふるものなり。試みに天下の夫にして発狂する権利を得たりとせば、彼等は悉家族を後じ、或は道塗に行吟し、或は山沢に逍遙し、或は精神病院裡に飽食暖衣するの幸福を得べし。然れども世界に誇るべき二十年來の家族主義は土崩瓦解するを免むべしなり。語に曰、其罪を悪んで其人を悪まずと。吾人は素より忍野氏に酷ならんとするものにあらざるなり。然れども輕忽に発狂したる罪は鼓を鳴らして責めざるべからず。否、忍野氏の罪のみならず。発狂禁止令を等閑に附せる歴代政府の失政をも天に替つて責めざるべからず。芥川龍之介『馬の脚』

Like an unblemished golden jar, our glorious National Essence stands upon a foundation of belief in the family. We need not ask, then, how grave the responsibilities of the head of any one family might be.

## 袴谷憲昭

Does the head of a family have the right to go mad any time he feels like it? To this question we must offer a resounding "No!" Imagine what would happen if the husbands of the world suddenly acquired the right to go mad. All, without exception, would leave their families behind for happy life of song on the road, or wandering over hill and dale, or being kept well fed and clothed in an insane asylum. Then our 2,000-year-old belief in the family - our very pride in the eyes of the world - could not fail to collapse. As the ancient records have taught us, "Hate the crime, not the criminal." We are not, of course, urging that Mr. Oshino be treated harshly. We must, however, loudly beat the drum to condemn his rash crime of having gone mad. No, let this not be limited to Mr. Oshino's crime alone. We must also condemn the utter misfeasance of successive administrations for having neglected our urgent need for a law pro-

hitting insanity. Jay Rubin (tr.), *Horse Legs*, Penguin Classics, 2006

サムライブルー、ドルトムントのピッチに敵る。試合終了後、いつもは冷静に受け応えしている中田英寿選手もピッチの芝生に仰向けに横になったままいつまでも起き上がらない。六月二十三日の金曜日、いつもの金曜日は五時半過ぎに起きて大学へ向う準備をするのだが、この日は四時に目が覚めて、ついつい敗けると分かっていてサッカーのワールドカップの対ブラジル戦を見てしまった。案の定、サムライブルーは1-4でその力の差を見せつけられて冒頭のごとく破れてしまったのである。我が家の財務大臣は、第一戦のオーストラリア戦から勝てないと言っていた。サッカーには私より素人だが、シュートの力も、選手の体力も弱々しいと言うのである。私も口の上では、早くから日本のマスコミ「大本営」論を打ち上げており、財務大臣の言うとおりでと思っていたのだが、頭の片隅の奥深くは、「大本営」に洗脳されていたのかも知れず、ついつい完全に望みが截たれるまで見てしまったのは悲しいというほかはない。「サムライブルー」などとは一体だれが命名したものなのか。しかし、我が国の大半は、「武士道」よろしく、やはり敵の戦力も冷静に分析しないままに「精神一到何事か成らざらん」の根性主義で、いつかは神風が吹くとも思っていたのではないだろうか。

そんな「武士道」のまだまだ根強い日本に果してその筋のお説教が必要かと思うような本が送り出され、しかも「武士道」支持者の多きゆえか、それが馬鹿受けしているというのである。文字

通りのミリオン(million)セラーだというのが、その本の名を『国家の品格』という。従って、わざわざ紹介するようなこともないのだが、よって批判の方により多く頁を割きたいと思う。しかし、私自身は、こういうミリオンセラーのあることも久しく知らず、私がこの本のことを知ったのは、確か春休み中の三月二十三日(木)だったと思うが、その日放映のNHKの「クローズアップ現代」によるのである。そのテーマは、あまり正確に覚えてはいないが、最近の新書ブームについてであったように思う。私にはNHKがなんでこんな新書の宣伝をと思うような内容であったが、その中には、その時はまだ出版されていない岩波新書としての新赤版の柄谷行人氏の『世界共和国へ』の紹介もあり柄谷氏自身の映像も流れていたと記憶する。今、書評を書くために、新潮新書として出たこの『国家の品格』を引っ張り出すと、本の中扉の裏に「二〇〇六年三月二十七日 横浜に出 有隣堂にて求む 帰りの電車にて一読 その杜撰さに驚く 翌三月二十八日 チェックを入れるため再び読み立てしきりなり」とある。あまり本にこういうことを書く習慣はないが、よほど腹に据え兼ねたに違いない。今はさすがに冷静になっているが、バラバラ捲っているとまたその時の気持が甦ってくるのである。

しかし、冷静なうちに紹介だけはしておいた方がよいだろう。本書は、城西国際大学と東芝国際交流財団との共催の講演記録をもとにしたものごとであるが、「目次」は次のとおりである。

はじめに

## 第一章 近代的合理精神の限界

すべての先進国で社会の荒廃が進行している。その

原因は、近代のあらゆるイデオロギーの根幹を成す「近代的合理精神」が限界にぶつかったことにある。「論理」だけでは世界が破綻する

「論理を徹底すれば問題が解決できる」という考え方は誤りである。帝国主義でも共産主義でも資本主義でも例外はない。「美しい論理」に内在する四つの欠陥を指摘する。

### 第三章 自由、平等、民主主義を疑う

自由と平等の概念は欧米が作り上げた「フィクション」である。民主主義の前提条件、「成熟した国民」は永遠に存在しない。欧米社会の前提を根底から問う。

### 第四章 「情緒」と「形」の国、日本

自然への感受性、ものあわれ、懐かしさ、惻隱の情……。論理偏重の欧米型文明に代わりうる、「情緒」や「形」を重んじた日本型文明の可能性。

### 第五章 「武士道精神」の復活を

鎌倉武士の「戦いの掟」だった武士道は、日本人の道徳の核をなす「武士道精神」へと洗練されてきた。新渡戸稲造の『武士道』を継ぎながら、その今日性を論じる。

### 第六章 なぜ「情緒と形」が大事なのか

「情緒と形」の文明は、日本に限定すべきものではない。そこには世界に通用する普遍性がある。六つの理由を挙げて説く、「情緒と形」の大切さ。

### 第七章 国家の品格

日本が目指すべきは「普通の国」ではない。他のどことも徹底的に違う「異常な国」だ。「天才を生む国家」の条件、「品格ある国家」の指標とは。

章毎に簡単なその章の要約までついた「目次」であるから、これでは本書の概略も尽きているのだが、本書を手にして私に初めて分かったのは、カバー裏（奥付の頁もやや短いがほぼ同じ）に記されている次のような著者の経歴であった。

藤原正彦（ふじわら まさひこ）一九四三（昭和十八）年旧満州生まれ。東京大学理学部数学科、同大学院修士課程修了。コロラド大学助教授等を経て、お茶の水女子大学理学部教授。作家新田次郎、藤原ていの次男。著書に『若き数学者のアメリカ』『天才の栄光と挫折』等他、共著に『世にも美しい数字入門』。

まず私とは生年が同じで、従って全く同い年であることが私を驚かせたが、電車の中で読み進めるうちに、同じなのはそれだけで、生き方から考え方まで、それこそ極少のことを除いては、全く正反対であることを思い知らされたのである。仮りに高校生の頃を例に取れば、片や東京で数学は勿論であるところが英語も日本一かと思えるような秀才であるのに対して、こちららは北海道のド田舎で数学もずんずん厭になってきた上に英語とては発音もできないような文学書乱読の落ち零れ。こんな違いならいくらでも書けるが、あまり脱線しないうちに、その英語の話から片付けていくことにしよう。藤原正彦氏（理系の人なら大抵は博士の学位をお持ちと思うが間違いがあつては却つて失礼になるので敢えて

氏のままとさせて頂く）は、「情緒が眞の国際人を育てる」という御自身の見解に絡めて、英語教育について次のように述べている。

私は高校の頃、英語に圧倒的な自信があつて、各種の模擬試験でもしばしば一番とか二番を取つていました。「俺が日本で一番だ」と信じていました。

ところがアメリカやイギリスへ行つたら、みんな私より英語を上手に話すのでびっくりしました。そのアメリカやイギリスで、国際人と言える人がどのくらいいるかと言えば、一割に満たない。せいぜい数%です。英語がいくら出来ても、国際人どころか、お話にならないような連中が半分くらいです。小学校でどれだけ英語を教えたところで、国際人になれるわけではないということです。

もちろん、英語が出来るに越したことはない。家庭の教育として英語を教えるのは全然構わない。我が家も一年間英国で暮らして帰国した後、せつかく覚えた英語を忘れないよう、子供たちに週一回、英国人の家庭教師を付けていました。

それは家庭の方針としてスイミングスクールに通わせたり、ピアノのレッスンを受けさせたりするのと同じです。課外教育では、各家庭の価値観により何を習わせてもよい。しかし、公立小学校のカリキュラムに英語を入れてはいけません。

（一四三 一四四頁）

しかし、「自由」と「平等」に敵意を持っている藤原氏は、「平等」が生み出す教育の「不平等」について次のように指摘しているのである。

平等と平等も衝突です。平等な条件で競争すると弱肉強食となり、貧富の差が大きくなり、不平等となります。結果の平等ではなく機会の平等だ、という論が流行していますが、噴飯物です。全大学生の親の中で、東大生の親の所得が最も多いことが証拠です。貧者の子弟は良質の教育を受ける経済力に欠けるため、東大入学の機会が小さくなります。すなわち、平等な競争が貧富の差という結果の不平等を生み、それが機会の不平等を生んでいるのです。平等が不平等を生むということです。結局、神は自由も平等も与えなかったということです。

もちろん民主主義、自由、平等には、それぞれ一冊になるほど美しい論理が通っています。だから世界は酔つてしまつたのです。論理とか合理に頼りすぎてきたことが、現代世界の当面する苦境の眞の原因と想つのです。（九三 九四頁）

英語を公立小学校で教えてはいけませんが、家庭でなら、スイミングやピアノを習わせるように、家庭教師をつけてまで教えてもよいという人が、この家庭の「不平等」は、「平等」や「自由」を金科玉条とする民主主義から生じていると批判するのであるが、私なら、その「平等」や「自由」を守るためにはどうすればよいかと考えなければならないと思つのである。

しかし、今は英語教育や民主主義の話はすまい。英語に絡んだ国際人の話に戻せば、藤原氏はせつかく英語も得意でアメリカやイギリスでも学んでおられるのだから、「情緒が眞の国際人を育てる」と国内向けの発言をなさるよりは、「この御著書をすぐにも英語で出版して下されば、いくら英語ができても氏が「眞の国際人」でないことはすぐに論証されるかもしれない。恐ら

く、氏が尊敬する新渡戸稲造の *Bushido: The Soul of Japan* ほどには売れもしないし読まれもしないし、今時このような井の中の蛙のごとき「武士道」はそれこそ「噴飯物」で世界に通じようもないからである。

そして、藤原氏が強調する「情緒」といえば、氏と同世代の私としては、同じ数学者でもある岡潔博士のことを想起するのであるが、この点はやはり氏も岡博士の強い影響下にはあつたらしい。本書の初めの方で、「野に咲くスミレが美しい」ということは論理では説明できない(四九頁)などという一行中に、「野に咲くスミレ」などという語句を見出すと、なんとなく岡博士の『春宵十話』や『紫の火花』などの本を思い出してしまう私なのだが、果たせるかな、藤原氏も、本書の後方(一四〇—一四一頁)で岡博士にもきちんと触れておられる。『春宵十話』が出たのは私の大学一年の終りごろ、『紫の火花』が出たのは大学三年の時であり、今の藤原氏の売れ行きには及ばないだろうが、当時としてはかなり売れたものと思う。岡博士は数学の「多変数複素関数論」という分野で大きな業績を挙げられた方で、その分野のことは私には分からぬまでも、岡博士の数学上の発見にまつわる喜びはその本の記述から私にもよく感得できたし、文学は芥川とドストエーフスキイでなければならぬとの博士の深い思い入れも、私の解釈とは違った節があるにせよ、手に取るように感じるものができたのである。そもそも『紫の火花』という書名も芥川絡みで、博士御自身がその「まえがき」で『紫の火花』という表題は、旧い友人の(といつても会つたことはないのだが)芥川に、その激しい決意の表現を借りたのである。「とおっしゃっていたことを

私は昨日のごとくのようによく覚えていた。この春、そのことを確認した直後に、不思議な符合のように、注文していた今度 Penguin Classics として出たジェイ・ルービン(Jay Rubin)訳の Ryunosuke Akutagawa, *Rashomon and Seventeen Other Stories* が届いたのである。もっとも、その表紙が orientalism に迎合したかのような五稜亭広貞の武者絵だったのには痛く失望したが、驚いたことに、その裏表紙の上の横には、岡潔博士が触れていたのと同じ『或阿呆の一生』の「火花」の一文が "those purple sparks... he would trade his life for the chance to hold them in his hands" と印刷されていた。私は体に電流の走るようなショックを感じたが、今は思い直して、その「火花」の全文を引いておきたい。

彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可也烈しかつた。彼は水沫の満ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発してゐた。彼は妙に感動した。彼の上着のポケットは彼等の同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠してゐた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不変鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、溼まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。(なお、これに対応する上掲英訳は p.190)

これを「情緒」と言つてよいのかどうか、私には正確に分らないが、一応「情緒」と呼ぶことにさせてもらえば、藤原氏の本

書には、同氏が「論理」よりも「情緒」を強調するにもかかわらず、我々をいつまでも引き止めておかざるをえないような深い情感が全く欠如しているのである。しかも、数学に関してさえ、例えば、岡博士が「多変数複素関数論」の分野で業績を挙げた前の昼行燈のような行状だとか発見の瞬間の喜びだとかについて語ったようなことはもとより、数学の楽しさについてもその分野についても、我々は本書から聞かされることはない。あるのは、アメリカで教えたとか、数学の日本のレベルだとか、いわば、世俗的なことばかりで、学問に関する数学者の深い知見などはどこにも窺えない。もつとも、タイトルが「国家の品格」なのだから、たつがりと政治的な発言に終始されたとしても特に「羊頭狗肉」のわけでもなく、「いちめくじらを立てることもないのだが、野蛮な「武士道」を語って、これが売れているわけだから、見過すわけにはいかなのである。しかも、これを私が「野蛮だ」というのは、例えば、会津藩の「什の掟」<sup>じのおきて</sup>を推奨して、次のように言っているからにはかならない。

要するにこれは「問答無用」「いけないことはいけない」と言っている。これが最も重要です。すべてを論理で説明しようとすることは出来ない。だからこそ、「ならぬことばならぬものです」と、価値観を押しつけたのです。（四八頁）

「いけないことはいけない」と言うのは当然かもしれないが、いけないなら、すべては論理で説明できないにせよ、可能な限り言葉を尽してその非を論証しようとする「問答有用」こそが藤原氏の帰依している。「武士道」の淵源ともされる禅の更に淵源である仏教の基本的立場なのである。しかし、藤原氏はとにかく、問

答無用」に自分の価値観だけをゴリ押ししようというのであるから、「サムライ・ブルー」を「大本営」並みに担ぎ上げたマスコミ同様に危険といわなければならない。そして、「この「問答無用」が、「靖国を拝してなにが悪い」「行くと言ったら俺は行く」といったような馬鹿げた行動への圧倒的支持にもなっているのである。しかるに、芥川の『馬の脚』には、家族主義の上に立つ「団体」擁護の立場から「問答無用」の狂信的「発狂禁止令」制定を支持する『順天時報』の主筆牟多口氏が登場する。牟多口氏は、「二千年来の家族主義」の土崩瓦解を防ぐためにその「発狂禁止令」なるものを支持するのであるが、たまたま、この『馬の脚』も上掲の英訳中には翻訳されていたので、先のような偶然的符合から、原文同様、本書評の枕に使わせてもらった。しかし、牟多口氏の主張などは、単なる虚構上のこととして、笑ってすましようなものでは決してないのである。藤原氏もまた、「国家の品格」に絡めて、我が国の種々の伝統にも触れ、また、「千五百年以上も続いた天皇の万世一系」（一七二頁）などという表現にも言い及んでおられるが、この点を問題にする前に、藤原氏が言うところの「論理」とはどのようなものかを本書中に指摘してみることにはしたい。まず、「論理」の構造については単純化して次のように説明されている。

論理というものを単純化して考えてみます。まずAがあつて、AならばB、BならばC、CならばD……という形で、最終的に「Z」という結論にたどり着く。出発点がAで結論がZ。そして「Aならば」という場合の「ならば」が論理です。このようなAからZまでの論理の鎖を通して、出発点Aから結論Z

に行く。

ところが出発点Aを考えてみると、AからはBに向かつて論理という矢印が出ていますが、Aに向かつてくる矢印は一つもありません。出発点だから当り前です。

すなわち、このAは、論理的帰結ではなく常に仮説なのです。そして、この仮説を選ぶのは論理ではなく、主にそれを選ぶ人の情緒なのです。宗教的情緒をも含めた広い意味の情緒です。(五〇 五一頁)

次には、このような単純な原理の適用面として、「情緒力がなくて論理的な人」という最悪なケースについては、次のように説明されている。

ここに非常に頭の良い男がいるとします。東大の法学部を一番で出たとします。当然ながら、論理的思考は得意中の得意です。しかし、東大に入るまでに情緒力はあまり試されないから、こちらはあまり発達してないと仮定します。

仮に彼が出発点Aを誤って選んだとする。もちろん後の論理は絶対に間違えない。すると、後の論理が正しければ正しいほど、結論は絶対的な誤りになります。

あまり頭が良くない人なら、途中で論理が二転、三転して、最後には正しい結論に戻ったりもしますが、下手に頭が良いとそのま行ってしまう。頭はよいのに出発点Aを選ぶ情緒力の育っていない人というのが、非常に怖いのです。現実には、こういう人が非常に多い。

このような情緒力とか、あるいは形というものを身体に刷り込んでいない人が駆使する論理は、ほとんど常に自己正当化に

過ぎません。世の中に流布する論理のほとんどが、私には自己正当化に見えて仕方ありません。(五三 五四頁)

このような藤原氏の「論理」の原理の適用例からすると、私などはきつと「論理が二転、三転」して「頭が良くない人」の最適用にされてしまいそうだが、そもそもいかに仮定の例だからといって、私にはとても、東大の法学部を一番で出たならば、当然、論理的思考は得意中の得意です」という「論理」さえ組み立てることはできないのである。しかし、一応は仮定だとされているのだから、あくまでも仮りにこれを認めることにすれば、これは最悪なケースとして他人事のように説明されているものの、事實は法学部出ではないにせよ、この話は藤原氏自身の推論のことをいっているのではないかとさえ私には思われる。本書は、始めに紹介したように講演筆録から出版の形にされたものであるから、「万世一系」については、他の話題と同じように話し言葉ではあまり述べられていないので、ここでは、近刊の同『この国のけじめ』(文芸春秋、二〇〇六年四月)によつて、藤原氏のその考え方を見てみよう。因みに、取り上げる文章の見出しは「憲法と世論で伝統を論ずるなかれ」である。

天皇家の根幹は万世一系である。万世一系とは、神武天皇以来、男系天皇のみを擁立してきたということである。男系とは、父親 父親 父親とたどると必ず神武天皇にたどり着くということである。これまで八人十代の女性天皇がいたが、すべて適任の男系が成長するまでの中継ぎであつて、その男系でない配偶者との子供が天皇になつたことはただの一度もない。女系天皇となつてしまつからである。

二十五代の武烈天皇は、適切な男系男子が周囲に見当らず、何代も前に分かれ傍系となった男系男子を次の天皇とした。十親等も離れた者を世継ぎとするなどという綱渡りさえしなから、必死の思いで男系を守ってきたのである。涙ぐましい努力により万世一系が保たれたからこそ現在、天皇は世界唯一の皇帝として世界から一目置かれ、王様や大統領とは別格の存在となつていたのである。（上掲書、九八頁）

まるで天皇はシーラカンスだと言っているように私には聞えるが、また、このような父系尊重説を拝聴していると、「天皇」サラブレッド牡馬説「みたいものだ」と「噴飯」しそうにもなる。しかし、藤原氏は大真面目なのだろうからあまり揶揄したように思われない方がよいだろう。とはいえ、これは、「事実」を語っているのか、それとも「論理」を語っているのか。仮りに後者だとするなら、藤原氏は、「論理の鎖」をZからAに逆に辿るように、「父親」「父親」と辿っていくれば必然的に神武天皇に辿り着く、としているわけである。しかし、これが「論理」なら、その出発点Aである神武天皇は「仮説」だということになる。だが、天皇崇拜者藤原氏が神武天皇を「仮説」などと思つことは決してありえないだろうから、これは「論理」ではないのだろう。では、神武天皇の存在は「事実」なのか。歴史的科学的「事実」ならば検証されなければならないが、『古事記』や『日本書紀』の記述は藤原氏によって果して検証されているのか。まさか、神武天皇のDNAが発見されて、「シェファーンソン家」で働いていた奴隷の子孫がシェファーンソンの子孫であるらしいことがDNA鑑定により判明し（『七三頁』）たよつた、現天皇のそれと一致したなどと

言っているわけでもないのだろうから、やはり文献の「事実」たることの証明は藤原氏にとって必要であろう。しかし、それがなされない以上、藤原氏はこれを「論理」として簡単に処理したいのかも知れない。もっとも私には、これが純粹な「論理」とするならば、神武天皇と現天皇のいずれを藤原氏が出発点Aもしくは結論Zとしているのかさえ分らないのであるが、しかし、「論理」とされたいのなら、なんらかの「論理の鎖」を追っていることは確かはずである。しかも、そうしながら、「頭が良い」とそのまま行ってしまうという見事な誤りは犯していないかのようには、あまり頭が良くない「素振り」をしてみせたのか、武烈天皇のことは知っているぞと言わんばかりの文勢が先の藤原氏の文章には感じられる。しかし、「東大の法学部を一番で出たならば、当然、論理的思考は得意中の得意です」という類の「論理」は実は「論理」でもなんでもない。それは、私には、一旦建物を造り橋を架けアメリカの言うことを聞き出して出発してしまつたら止まるどころを知らない我が国の「役人天国」の実態に迎合しながら、それをいかにも「論理」の誤りであるかのように「問答無用」の「情緒」から打つ手切つて見せて、「大本営」のマスコミの支配下にある大衆（populacy）の拍手喝采を受けているポピュリズム（populism）としか思えないのである。なるほど、藤原氏は本書でも、次のように一見ポピュリズムを批判している。

ロックやモンテスキューの言い始めた「三権分立」は、近代民主主義の基本となっておりますが、現実にはこの立法・行政・司法の三権すら、今では第一権力となったマスコミの下にあ

る。民主主義がそんな事態に陥ることは、誰も想像していなかったのではないだろうか。

政治においては「ポピュリズム」ということがよく言われませんが、民主主義国家でこれだけマスコミが発達すれば、行政がポピュリズムに流れるのはほぼ必然でしょう。立法も同じです。立法を担っているのは政治家で、その政治家を選ぶのは国民なのですから。(八〇 八一頁)

しかし、私からすれば、三権の長やその傘下にある政治家や役人以上に、「今では第一権力となったマスコミの下」にあるのは藤原氏御自身のように思われる。それを自覚されていなければ余計恐ろしいのだが、藤原氏は、知ってか識らずか、その「マスコミ」に乗せられて本を作らされているのであり(喋ったことを原稿にしてみらっているならあまり「作らされた」との感覚はないかもしれないが)、それは、世に迎合しやすいように「マスコミ」によって操作され宣伝されているから、当然よく売れるわけである。この状況は経済的には「資本主義 (capitalism)」の原理によって説明されるであろうが、しかし、この「資本主義」のもたらす「グローバリズム」には、一応は、藤原氏も大反対なのだから驚く。左に、その一節を引いてみよう。

二十世紀の最後の頃から跋扈し始めたグローバリズムは、冷戦後の世界制覇を狙うアメリカの戦略に過ぎません。世界はこれに對して、断固戦いを挑まなければいけない。グローバリズムは歴史的誤りと言ってよいものだからです。

資本主義をアメリカ化するため、冷戦後に、アメリカ式市場経済、リストラ自由のアメリカ式経営、株式会社主義、アメリカ

方式会計基準などを各国は半ば強要されてきました。経済がすっかり変わってしまい、どの国でも貧富の差が急速に拡大しつつあります。大都市の発展と田舎の衰退が共通に進んでいきます。

アメリカにおける恐ろしいほどの貧富の差については先に申しました。ハリケーンに襲われたニューヨークで、被害者のほとんどは貧困層、そのほとんどは黒人でした。裕福な白人は低地には住まないのです。逃げる手段の車もなければ長距離バスの切符すら買えない人々です。ニューヨークで生まれた赤ん坊が満一歳まで生き延びる確率は北京より低いと言われるほどです。それほど貧富の格差が開いたということです。(一一三 五 一三六頁)

私も、次に簡単に触れるように、「グローバリズム」には反対である。しかし、私はその「グローバリズム」の問題はまさに「資本主義」そのものがもたらす問題にほかならないと考えているから、マルクスの『資本論 (Das Kapital)』のような視点を決して失うことなく、「資本主義」を批判したり、それに基づいて規制を設けたりする以外に、「貧富の格差」を是正する道はないと思っている。藤原氏のおっしゃるように、「武士道」と日本式「情緒」があれば、「資本主義」や「グローバリズム」を改めるとは全く思っていないのである。それゆえ、私は、今春より駒沢大学にも設立された「グローバル・メディア・スタディズ学部」という新設学部での「仏教と人間」という講義科目の『講義内容』の「講義のねらい」には、次のように記しておいた。

国や政府が資本を投じて創設した assetsなどを民間に譲渡

するところを privatization といふ。一方、capitalism のもたらす歪みを軽減するために設けられた regulation を解除することを deregulation といふ。しかるに privatization も deregulation も自ら責任を取りうる individuals の確立した社会にして初めて可能となるが、あたかもそれが既来实现しているかのように、経団連などを中心に進められたのが「自己責任」の強調による「終身雇用」の解体である。privatization と deregulation で自らの赤字軽減を企及しようとする little government は、その結果もたらされる社会不安を力によって押さえるため、国内には警察権の強化を、国外には自衛隊の軍隊化を実現しようとしている。U. S. A. を中心に進められているこのような global な政策を globalism といふ。これは一九八〇年代以降の PC の普及と共にあったが、本々グローバル・メディア・スタティス(学部)は、そのような globalism の一環を media を基本に学問的に確立していかうとする学部のはずである。その学部設立の idea は Buddhism に置かれている。その Buddhism を Buddhismology の成果に基づいて講義する。(九頁)

仮りに両者の間に「グローバルイズム」批判という極少の共通項があったにせよ、藤原氏と私の言っていることは全く逆なことなのである。それゆえ、藤原氏の「武士道」や日本式「情緒」の主張は、「マスコミ」や「経団連など」を喜ばせるが、私の右のような主張の根本には、資本主義「批判」があるのではなく、私の場合は、「マスコミ」や「経団連など」には見向きもされないに違いない。しかも、藤原氏は、ただその主張内容のみならず、その主張の仕方、一見数学者で「論理」を駆使しそうな人が、「論理」を小

馬鹿にしてそれを非難し、御自分の方はといえば、既に触れたように、「ほとんど常に自己正当化に過ぎ」ない「世の中に流布する論理」を堂々と振り回すので、爆発的に受けるのである。少し長くなるが、そういう見本を次に示しておいた方がよいだろう。論理は、長く進めて初めて深みに達するという性質を持っているのですが、先ほど申しましたように、日常の論理は長いと危険で、とても使い物になりません。

一方、短い論理というのは深みに達しない。従って、論理といふものは本来、効用のほとんどないものです。なのに人間は論理が大好きで、論理は世にはびこっています。ほぼすべてワンステップかツーステップの論理です。

例えばいじめがあるとします。するとすぐに「みんな仲良く」などと言う。実に分かり易い。

しかし、少しでも社会生活を送った人間なら、「みんな仲良く」なんか出来るわけがないと分かっている。どんな組織だって嫌な奴だらけです。右を見ても左を見ても嫌な奴。そういう自分がいちばん嫌な奴。それが普通なのです。

最近では、いじめがあるからといって、学校にカウンセラーを置いたりする。論理的で分かりやすい。これはアメリカの方が先で、たくさんの学校にカウンセラーとかスクール・サイコロジストがいる。でもいじめは減らない。

(この小節の小見出し略) いじめに対して何をすべきか。カウンセラーを置く、などという対症療法より、武士道精神にのっとって「卑怯」を教えないといけない。「いじめが多いからカウンセラーを置きましょう」という単純な論理にくらべ、

「いじめが多いから卑怯を教えましょう」は論理的でないから、国民に受けません。

しかし、いじめを本当に減らしたいなら、「大勢で一人をやつつけることは文句なしに卑怯である」ということを、叩き込まないといけない。たとえ、いじめている側の子供たちが清く正しく美しく、いじめられている側が性格のひん曲がった大嘘つきだったとしても、です。「そんな奴なら大勢で制裁していいじゃないか」というのは論理の話。「卑怯」というのはそういう論理を超越して、とにかく「駄目だから駄目だ」ということです。この世の中には、論理に乗らないが大切なことがある。それを徹底的に叩き込むしかありません。いじめをするような卑怯者は生きる価値すらない、ということをとことん叩き込むことです。

しかし、政府も官僚も「識者」と称する人たちも、戦後六十年もたち、「論理的に説明できることだけを教える」という教育を受けた人ばかりになってしまったのです。

論理が通ることは脳に快いから、人々はこのようにすぐ理解できる論理すなわちワンステップやツーステップの論理にとびついてしまう。従ってこの本質に達しない。いじめ問題なんか典型です。こみいった問題の解決を図ろうとしたら人間性に対する深い洞察が必要になる。

実はワンステップやツーステップの論理の跳梁は我が国ばかりではありません。世界中がこれに冒されています。欧米の支配を支えてきた論理や合理ですが、実はそれらのほぼすべてがワンステップやツーステップで彩られているのです。(六二

#### 六四頁)

長い引用に値するような文章ではないがこのような、駄目だから駄目だ」という「問答無用」式の野蛮な口吻が馬鹿受けしている元区なのだから、よく読んでその実態を分析的によく見定めることは大切なことだと思つ。しかし、よく読めば(あるいはざつと目を通しただけでも)、ここで用いられている「論理」をちゃんとした「論理」だと判断する人はまずないのではないかと思われる。藤原氏は、「論理は世にはびこっています。」とおっしゃるが、流行っているのはむしろ藤原氏の言う「論理」即ち「問答無用」の「武士道」なのではないだろうか。逆に、本当の「論理」が滲透しているところには、「いじめ」だつてないのではないだろうか。確かに、人間だけが、人殺しもする(熊が人間を殺しても殺人罪にはならない)し盗みもする(猫が秋刀魚を盗んでも偷盗罪にはならない)しレイプもするし嘘もつくし酒も飲む(酒を作ったり飲んだりする猿もいるとは聞くが)が、また、人間だけが「言葉(Logos)」をもつのであるから、その「言葉」だけの筋道を「論理(Logos)」としてじっくり時間をかけて正しいことをお互いを選び取っていけるようになれば、極めて難しいことかもしれないが、「いじめ」も「暴力」も「戦争」もなくならないのではないだろうか。たとえそれが極めて難しいものであつても、それが、力に訴える行為を押し止める真の方法はないのではないだろうか。しかし、それが難しいからといって、すぐ短絡的に「ワンステップ」「ツーステップ」で「問答無用」とばかり押し進めていけば、「耐震擬装建築問題」だつていつでも起りうるのである。だから、私が先の「講義のねらい」を書いて大学へ

提出した直後に、例の「姉齒事件」が発覚した時にも、私はなんと非道いこととは思ったものの特に予期もできぬこととの驚きはなかった。しかし、それから「ライブドア問題」「BSE牛肉輸入問題」「防衛庁談合問題」などが目白押しとなり、今思い出しでもどれが先だったか分からなくなるくらいであるが、これらに一挙に幕を引いたのが「永田議員ガセネタ事件」であった。この時に、我が国の総理大臣が、わざわざ辞書を引いてきて、「ガセネタとは、事実に基づかない人騒がせな情報ネタである」「みたいな説明をしたには呆然としたが、呆然としたのも、御自分は、イラクに大量破壊兵器があるというアメリカの「ガセネタ」を根拠に自衛隊派兵を行い、しかも当のアメリカの大統領がその虚偽性を認めたのに、それさえ認めない自分のことは棚に上げて他人のことだけを平然として追及していたからである。「ガセネタ」も日本ではデカくなれば市民権を得てしまうのか、永田議員を追い掛けた「マスコミ」もアメリカに掴まれた「ガセネタ」について総理に問い質すことはほとんどなかったように思われる。その総理も、つい最近、また訪米し、メンフィスに行つてプレスリーの生家を訪れ「love(rub) me tender」と口遊んでいる様子がテレビの映像にも流れていたが、どうせなら、総理を辞めてから一人で行つて楽しんでくれたら、これほど惨めな気持をせずにすんだらうにと頻りに思われたのである。しかし、周囲の冷笑にも我聞せずで、「駄目だから駄目だ」式に、「好いだから好いのだ」あるいは「行くのだから行くのだ」とばかりに、この八月十五日には靖国神社にも参拝しようという勢いの総理もまた、藤原氏とはほぼ同世代で一九四二（昭和十七）年の生まれ、まさ

に戦後育ちのアメリカ気触れには見える。この世代はまた、戦後の「君の名は」の世代でもある。これについては、私自身も感じるところがあったので、石割透「戦後の風景（一）」、「君の名は」という事件「駒澤短期大学研究紀要」第三四号（二〇〇六年三月）、一―二五頁をぜひとも参照されたい。ただ、ここで私が言つておきたいのは、私はむしろ同じ時期に生まれながら全く違った生き方や考え方が存在するのだという方が入っているのであつて、決して押し並べてその時代の人には一種の同じ傾向があるなどという意味での世代論を打っているわけではないことである。ところで、藤原氏なら、近時のこれらの事件も皆な、「武士道」が頼れ、日本のよさが失われたから起つていると説明されるかもしれない。藤原氏は、本書で次のように述べているからである。

私は「武士道精神こそ世界を救う」と考えていますので、株主権をやたらに言い立てる人には、「下品」で「卑怯」という印象を禁じ得ません。法に触れないなら何をやってもいい」と、財力にまかせてメディア買収を試みた人がいますが、日本人の過半数が彼を喝采しているのを見て、何とも絶望的な気分になられました。（二一九頁）

では、その藤原氏の依つて立つところの「武士道」とはなにか。これについて、本書は、前掲の「目次」にも明らかなごとく、第五章の「武士道精神」の復活を「主として」のべている。その「武士道」の淵源ともいふべき「禅」については、そこで、鈴木大拙博士にも触れながら、次のように言っている。

「禅や儒教は舶来のものじゃないか」と言う人がいるかも知れませんが、禅はもろろん中国で生まれたものですが、中国には

まったく根付かなかった。鎌倉時代に日本に来て、一気に日本に根付いた。これは、禅が中国人の考えとは相容れないもので、日本人の土着の考え方と非常に適合性が高かったということです。鈴木大拙氏の言葉によると、「日本的靈性」に合致していたのです。だから「そまたたく間に鎌倉武士の間に広がった。禅と儒教は日本人の間に古くからあった価値観です。理論化したのは中国人ということですから、そして、いつものことながら、日本人はそれを神道などと融合しつつ、日本化し、武士道精神へと昇華させたのです。(一一九頁)

ものを知らないということは恐ろしい。嘘とは知らずに堂々と断定的に喋ってしまうからである。右引の箇所だけでも言いたいことは山ほどあるが、ここでは誤りを二つだけ指摘しておくことにしよう。「禅はもちらん中国で生まれた」というのは真赤な嘘である。「禅(jhāna, dhyāna)」は勿論インドで生まれたというのが真実でなければならぬ。もとより曲学阿世の学者の中には「中国で生まれた」かのように擬装しようとするものもいることを知らぬわけではないが、所詮擬装は成功しまい。また、「禅」が「中国にはまったく根付かなかった」というのも嘘である。中国は唐代にチベットにおいて中国の仏教を代表しえたのはまさに「禅」だったのであり、その「禅」は唐代から宋代になって中国の文化を代表する舶来のものとして積極的に取り入れられていったと、正しくは言われなければならないであろう。なお、「ここで、藤原氏の論拠とされている鈴木大拙博士のこと及び博士を取り巻く時代のことについては、拙稿「寡婦の両銭物語とP.ケラーズ紹介のそれに対するS.ヒールの見解」、『駒澤短期大学仏教論集』

第九号(二〇〇三年十月)、二一九—二五一頁を参照されたい。

ところで、藤原氏が「武士道」の真の典拠としているのは、新渡戸稲造博士の『武士道』であるが、この新渡戸博士をモデルにした芥川龍之介の小説「手巾」や、その新渡戸が一高の校長だった頃からの弟子で芥川の一歳年下の矢内原忠雄(これが岩波文庫の『武士道』の訳者である)の頃の時代については、その『武士道』の問題と共に、拙稿「戦争の時代 日本文化礼賛者の系譜

『駒澤短期大学仏教論集』第一〇号(二〇〇四年十月)、一九—一四七頁で触れたことがあるので、新渡戸稲造博士の『武士道』についての問題の多くは、それに譲らせて頂きたい。

しかし、それにしても、このような『武士道』を背景にもちながら語られる本書の書名ともなっている「国家の品格」とは一体なんなのであるか。こんな質問をするのも、なにゆえに、数字者がこのような曖昧な書名を使うのかと思うからである。それは、本書の後に上引の「国家のけじめ」にしてもそうなのだ。そもそも「国家」という言葉からして曖昧なのだが、そこへもってきて、「品格」と言ったり、「けじめ」と言ったりするわけだから、およそ数学者の用いるような語法ではない。もっとも「けじめ」の普通の意味は「区別」で、試みに『新潮国語辞典』を引いてみると、古くはもつと具体的な「しきり」を意味していたようで、用例には、『源氏物語』「若菜」下の「こなたかなた御几帳ばかりをけじめにて」が挙げられている。それが現代語ではもつと抽象的な「区別」をも意味するようになったのかもしれないが、『齊藤和英大辞典』を引くと、英語でいえば、「difference」や「distinction」とされるようである。もつと抽象的には

“distinguishableness”でも許容されるのかもしれないが、しかし the distinguishableness of the State/Nation などとして果たして通じるものかどうか。英語に堪能な藤原氏御自身の見解を伺いたいところである。それにしても、なぜこのような言い方をしたかという点、本書のタイトル中の「品格」はかつて小錦が横綱に昇格するかしないかの問題の時期に「横綱の品格」ということで「品格」が国際的に問題となったことがあるからにほかならない。これについては、その当時論じたことがあるからで、拙稿「日本人とアニミズム」『駒澤大学仏教学部論集』第二三号（一九九二年十月）、三五—三七八頁（なお、その三五六頁、上段、一行の「サレワアアティサノ工生まれの小錦」は「本名サレワアアティサノ工の小錦」の誤りで訂正して頂きたい）を参照して頂くことにして、ここではあまり議論せず、「實際人」である藤原氏はその問題を知っていたと想定して、「品格」は当時『タイム（Time）』が訳した“dignity（威厳）”の意味でよしとおこう。しかるに、その「品格」を藤原氏は「はじめに」で次のように用いている。

本書は講演記録をもとに、それに大幅に筆を加えたものです。話し言葉に品が欠けていたため、ほとんどすべての文章に筆を入れる羽目になりました。品格なき筆者による品格ある国家論、という極めて珍しい書となりました。（六頁）

「品格なき筆者による品格ある国家論」などという自画自賛はどうか冗談であって欲しいと私は切望するのであるが、どうやら御本人は大真面目のようだから質が悪い。もっとも大真面目だからこそ「国家の品格」という言葉を書名に選んだのである以上、

「品格ある国家論」というのが冗談であって欲しいと願うことが自体が間違っていたのかもしれない。私も、自分の文章に「品」や「品格」があるとは到底思えないので、他人の文章の「品格」を論ずる資格はないが、書評としてはその大真面目の「国家の品格」という書名の意味を問うことは当然のことであらう。しかるに、この場合の「品格」が dignity でもよいのなら、「国家の品格」とは英語でいえば The dignity of Japan (the state/nation) を意味するのかもしれないが、藤原氏は、本書の第七章のまさに「国家の品格」では、これを「国柄」とも呼び換えて、次のように述べている。

「日本は」十年以上の不況が続いてなお、ヨーロッパのどの一國、アジアのどの一國と比べても、比較にならないほどの経済大国として存在しているわけです。この資源も何もない小さな島国がなぜ、これほど著しい実績を残してきたのか、これほど異常であったのか。よくよく考えないといけません。

大雑把に言うところ、日本人が持っていた「国柄」が素晴らしいものであったからです。世界に冠たる国柄を持っていたのです。

『文明の衝突』を書いたアメリカの国際政治学者サミュエル・ハンチントンが、世界の八大文明の一つとして日本文明を挙げています。日本が世界のどの国とも本質的に違う、独自の文化文明を作り上げてきたからです。先人の作り上げた日本文明の非常に優れた独自性を、どうにかして守り続けるのが、子孫である我々の義務だと思います。（一八〇—一八一頁）

そして、ここに述べられている素晴らしい「国柄」というものは、藤原氏の頭の中では、既に見たように、「世界から一目置か

れ「万世一系」の天皇に支えられていることになっているのである。それゆえ、藤原氏が「国家の品格」や「国柄」で各指そうとしているものは、実は、水戸学の会沢正志斎の「国体思想」に始まり、明治維新後の『大日本帝國憲法』の発令や『教育勅語』の下賜を経由して、戦前の一九三七(昭和一二)年に文部省より刊行された『国体の本義』に集約されることになった。「国体」とほとんど同じものを指していると言っても過言ではない。私には、「藤原家」には、その『国体の本義』そのものが書棚に鎮座ましましているのではないかと想われるほどである。しかるに、その「国体」は「政体」と違つたのが、外国語ではどうも表現されるのかとか、それに因む様々な議論とかにまつては、既に論じたこともあるので、拙稿「無責任体制論」『駒澤短期大学仏教論集』第三号(一九九七年十月)、一九五—二二三頁を参照頂くことにして、その「国体」の意味そのものは、『順天時報』主筆の牟岐口言ひの「家族主義の上」に立つ、「金匱無欠の国体」(Our glorious National Essence which stands upon a foundation of belief in the family)と大同小異のものと言つてよいであらう。その「国体の本義」中に求めれば次のとおりである。

我が国の孝は、人倫自然の関係を更に高めて、よく国体に合致するところの眞の特色が存する。我が国は一大家族国家であつて、皇室は臣民の宗家にましまし、国家生活の中心であらわれらる。臣民は祖先に対する敬慕の情を以て、宗家たる皇室を崇敬し奉り、天皇は臣民を赤子として愛ひみ給ひのたゞである。雄略天皇の御遺詔に「義は乃ち君臣、情は父子を兼ね」と仰せ

られてゐるのは、歴代天皇の大御心である。即ち君臣の關係は公であつて、義によつて結ばれるのであるが、それが単なる義にのみ止まらず、父子と等しき情によつて結ばれてゐることを言へさせられたのである。「わたし」に対する「おほやけ」は、大家を意味するのであつて、国即ち家の意味を現わしてゐる。(上掲書、四六—四七頁)

しかるに、アメリカが日本占領のために準備しながら実際に占領後の一九四九年に刊行された『国体の本義』の英訳 *Kokutai no Hongi: Cardinal Principles of the National Entity of Japan*, translated by John Owen Gauntlett and edited with an introduction by Robert King Hall, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts) は右の箇所が次のように訳されている。

Filial piety in our country has its true characteristics in its perfect conformity with our national entity by heightening still further the relationship between morality and nature. Our country is a great family nation, and the Imperial Household is the head family of the subjects and the nucleus of national life. The subjects revere the Imperial Household, which is the head family, with the tender esteem [they have] for their ancestors; and the Emperor loves his subjects as his very own. The words in the august will left by the Emperor Yūryaku [A. D. 457-479], which says: "Though righteousness may in effect be [between] sovereign and subject, affection is bound up

between father and child." bespeak the great august Will of the successive Emperors. That is to say, the relationship between sovereign and subject is public and bound with righteousness; and what he states is that it does not end solely in mere righteousness but that it is bound with sympathies similar to those between father and child. "Public" [=*Toyakei*] as opposed to "private" [*watatakushi*] signifies the court and means "nation", namely, "house". (*Ibid.*, pp. 89-90, footnotes略)

「おほぜけ (public)」が「大家 (the court)」であり、「国即ち家」(“nation”, namely, “house”)であるように、「大家族国家 (a great family nation)」とは、およそ近代の法治国家とは呼びえないであろうが、藤原氏の思い描く「国家」もまた「万世一系」の天皇に根拠を置く恐ろしく前近代的なものであることは既に見たとおりである。しかし、その素晴らしい「国柄」の「日本文明」の根拠を、藤原氏が、先の引用にも明らかかとおり、「万世一系」の天皇以外には、アメリカの政治学者ハンチントンにか求めえないのは悲しい限りである。そのハンチントンのことには、城福雅伸氏の『現代語訳・講義 成唯識論 巻第五』（春秋社、二〇〇五年）に対する私の書評、『駒澤短期大学仏教論集』第一号、二〇〇六年十月刊行予定）でも簡単に言及したので、ここでは触れないが、要するに、藤原氏にとっては、現憲法に基づく「民主主義」などとはむしろよいものである。再び、本書ではなく上掲の『この国のけじめ』に依ることになるが、「皇室典範を考える有識者会議」が出した女性系天皇容認という答申

に衝撃を受けた藤原氏の左のような発言は、よく氏のかかる無法振りを表しているであろう。

気を鎮め、答申に目を通してみることとした。長たらしい答申を隅々まで熟読する、というのがは初めてのことだった。そして、その空疎かつ凡庸な論理展開に愕然とした。

二千年の皇統を論ずるうえで、の原点が、なんと日本国憲法と世論だったのである。実際、答申では要所要所でこれら原点に戻り、結論へと論を進めている。この二つを原点とするなら、実はその時点で結論は一義的に定まってしまう。男女平等により長子優先である。議論は不要でさえある。

長い伝統を論ずる場合、それがどんなものであることが、先人に対する敬意と歴史に対する畏敬を胸に、虚心坦懐で臨むことが最低の要件である。この会議はその原則を逸脱し、移ろいやすい世論と、占領軍の作った憲法という、もともと不適切な原点を採用したのである。「有識者」の恐るべき不見識であった。

そもそも皇族は憲法の外にいる人である。だからこそ皇族には憲法で保障された選挙権も、居住や移動の自由や職業選択の自由もなく、納税の義務もないのである。男女同権だけを適用するのは無茶な話である。（上掲書、九七頁）

右引用のうち、その結果私がどう考えているかという違いを別にするなら、「皇族は憲法の外にいる人」という藤原氏の最末尾の小節での御指摘には、現憲法の第一章を意図しておっしゃっている限り私も賛成であり、この件に関する私見は述べたこともある（拙稿「戦争の時代」、前出、一四二頁、及び、拙稿「八種施考」、『駒澤短期大学仏教論集』第一号、二〇〇五年十月、一三三

（二九頁参照）が、藤原氏がこの答申に対していかなる意見を述べたのも勝手であるにせよ、気に入らないからといって、『日本国憲法』や世論に基づくのを怪からんと糾弾し、自分に都合のよい『二十年の皇統』に対してのみ、先人に対する敬意と歴史に対する畏敬を求めるのは余りにも無法というほかはないだろう。もとより、『民主主義』を否定する藤原氏は無法呼ばわりされるのも覚悟の上かもしれないが、新渡戸博士やその訳者矢内原忠雄博士でさえ、democracyを「平民道」や「民主主義」の方向に解釈しようとする強い志向は示していたにせよ、democracyを否定すべきだとは主張しなかったのである。従って、藤原氏の「万世一系」の皇統に対する確信の主張は、『順天時報』主筆の牟多口氏の「発狂禁止令」主張の態度となんの違ふところはないと言わなければならない。しかし、ひよっとしたら、藤原氏は、御自身の異常な狂信振りにはお気づきなかもしれない。氏は、本書の冒頭で既に次のように書いておられるのである。

私は、自分が正しいと確信していることについてのみ語るつもりですが、不幸にして私が確信していることは、日本や世界の人々が確信していることとは異なっております。もちろん私ひとりだけが正しくて、他のすべての人々が間違っている。かように思っております。

もっとも、いちばん身近で見ている女房に言わせると、私の話の半分は誤りと勘違い、残りの半分は誇張と大風呂敷敷のことです。私はまったくそうは思いませんが、そういう意見のあることはあらかじめお伝えしておきます。（一一一―一二頁）  
我々は人間なのだから自分ひとりだけが正しいなどということ

があるはずはないのであるが、さすがに興様はそのことを看破されていたと言うべきである。しかし、せつかくの忠告を聞かなかったせいで、この週刊誌のようなゴミにしかかならない本が売られて、「国体」という過去の亡霊の徘徊に拍車を掛けるようなことになってしまっているのである。

もっともゴミに付き合っている私もまたゴミのような存在であるが、本書評を書き始めて一日が経つか経たないかに、本書評の冒頭で触れたサッカーの中田英寿氏が引退を宣言し、その翌日には、あの格調高い引退声明文が新聞にも掲載された。以来、私は、自分のこのゴミのような文章を書き続ける意味をなんとも見失いそうになったが、書き始めてしまった以上敢えて書き上げようと努めてきた。今、そのゴミのような文章もやっと終ろうとしている。天才とは「他者」から異常に並外れて吸収し学びうる才能であると私は思っているが、中田英寿氏がそういう一人であることは間違いないだろう。中田選手には、「サムライブルー」という名のユニホームは着てもらいたくなかったが、凡百の「国際人」論争よりは、一人の「国際人」の存在の方がより真実を語ってくれるに違いない。そして、現憲法下の民主主義であればこそ、多くの中田選手も育ちうるのではないのだろうか。しかるに、近時の日本では、年寄りが寄って集って若者を無気力にする方向にのみ舵を取っていつているような気がして仕方がないのである。

（二〇〇六年七月八日）